

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：32103

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06564

研究課題名(和文)生成統語論と構造指示の仕組みによる相互補完的な説明体系の構築とその適用

研究課題名(英文)A Complementary Theory of Generative Syntax and Structure Indication and Its Applications

研究代表者

坂本 暁彦(Sakamoto, Akihiko)

常磐大学・コミュニティ振興学部・助教

研究者番号：50757193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：生成統語論では、話し手聞き手は同質の普遍文法を持つとされている。しかし、統語構造を生成するのは普遍文法を構成する原理であるものの、その構造は実際の言語使用の場面では線形化された表現として与えられるという意味で聞き手にとって不可視である。従って、話し手によって構築された統語構造の本質を聞き手に検知させる手段、即ち「構造指示の仕組み」が文法体系の中にあつて然るべきである。本研究では、日英語の諸現象(英語の会話における主語省略・日本語修辭疑問形成・日本語不変化詞残留・日本語属格複合語形成)について取り上げ、これらが普遍文法内の諸原理と構造指示の連動の結果として表面化するということを論証した。

研究成果の概要(英文)：In generative syntax, the speaker and the hearer are assumed to share the same grammatical system called Universal Grammar (UG). Although UG-internal principles implement structure generation, the generated structures are invisible to the hearer in the sense that they are conveyed as linearized strings in actual language use. For that reason, it is natural that the system of grammar should be equipped with the means of structure indication by which the speaker makes the structure corresponding to his or her intended meaning detectable for the hearer. In this research, I argued that some linguistic phenomena in English and Japanese (for English, subject omission in conversation and for Japanese, rhetorical question formation, particle stranding, and genitive compound formation) surface as a result of the interaction between UG-internal principles and structure indication.

研究分野：統語論

キーワード：Universal Grammar structure indication clausal typing scope determination rhetorical questions subject omission particle stranding genitive compounds

1. 研究開始当初の背景

(1) 聞き手視点不在の統語理論

生成統語論では、話し手聞き手は同質の普遍文法(統語構造を創造する際に人間が拠り所とする言語知識の集合体)を持つとされている。しかしながら、統語構造の生成は普遍文法を構成する諸原理に帰されるが、当該の構造は、実際の言語使用の場面では線形化された言語表現として伝達されるという意味で、聞き手にとって不可視である。そのため、話し手の意図する意味解釈に対応する構造の本質を聞き手に検知させる手段、即ち、「構造指示の仕組み」が文法体系の中であって然るべきである。この仕組みが存在すると想定したうえで、それが明示的に定式化されていないという意味で、また、その意味でのみ生成統語論は「聞き手視点不在の統語理論」であると言える。

(2) 聞き手視点の導入と統語理論構築

言語理論のためのミニマリスト・プログラム(Chomsky (1993))が提唱されて以来、聞き手視点不在の統語理論(便宜上、以下ではSTHP (Syntactic Theory without the Hearer's Perspective)と呼ぶ)からあらゆる余剰性が排除され、より抽象度の高い説明体系が構築される運びとなった。その一方で、言語使用のような統語外的な要因の重要性を論じ、STHPに聞き手視点を取り込もうとする、カートグラフィと呼ばれるアプローチ内部の動きもある(Rizzi (1997))。この種のアプローチのもとでは、聞き手視点の導入がCP領域内部における機能範疇の数の増大という形で現れる。例えば、聞き手との相互やり取りが関わる約束や命令といった発語内効力をForce Phraseとして機能範疇化して統語構造の中に組み込むという具合である。これは当然のことながら、統語論の外に位置づけられるべき要因がその内部に持ち込まれることになるため(Leech (1983))、説明の体系が煩雑化し、シンプルなSTHPの構築を目指すミニマリスト・プログラムの方針とは相容れない(統語論研究における機能範疇の取り扱いに関する議論についてはFukui and Sakai (2003), Narita (2011)等を参照のこと)。こうした一連の研究動向を踏まえると、統語外的な要因の一つとしての聞き手視点という観点を不適切にSTHP内部に組み込むというよりはむしろ、STHPによる説明を外側から補完する形で(Newmeyer (2003: 687))、言語使用のような要因を含む複雑な言語現象に対処していく必要があることがわかる。

2. 研究の目的

本研究は、「構造指示(普遍文法内の諸原理に基づき生成された統語構造の本質を聞き手に検知させる仕組み)」という、統語論と言語使用の接点にまつわる仕組みを提案し、意味論や語用論とのインターフェース研究も射程に入れた多角的な視点からの言語

分析を提供するものである。STHPがこれまで捉えきれなかった現象を、構造指示という観点からの相互補完的な説明を可能にする理論体系の構築を目指す。

WH要素のスコープ決定のような普遍文法の要請を満たすことで出来上がる個別言語の姿と、構造指示のような談話の要請を満たすことで出来上がる個別言語の姿といった、個別言語の二つの異なる側面をあぶり出すことで、新たな知見を与えることが可能となる。普遍文法が定義づける姿は言語不変の部分として、談話が定義づける姿は言語ごとに異なる可変部分としてそれぞれ抽出することにつながる。

3. 研究の方法

本研究が目的とする「生成統語論と構造指示の仕組みによる相互補完的な説明体系」の構築に当たっては、言語現象を丁寧に観察、記述、分析することを通して、その妥当性を検証する必要がある。構造指示の仕組みが統語的な諸原理と連動することを示すために、言語使用の要因が色濃く現れていると想定される現象(1)英語の会話における主語省略、(2)日本語修辭疑問形成、(3)日本語不変化詞残留、(4)日本語属格複合語形成を研究対象とする。

4. 研究成果

(1) 英語の会話における主語省略

生成統語論で一般に想定される英語の統語演算では、原理上、主語の生起が義務的である((1) *Am here.)。しかし、会話ではこの原理が違反されることがある((2) A: How do you like it? B: It Tastes good. A: Really? B: *It Tastes good. (cf. It tastes good.))。ここに統語論と言語使用の接点が認められる。(2)の話者Bは最初の発話で、主語のある無標形式では得られない特殊な意味効果(発話時における話し手の思考内容の曝け出し 日本語のイ落ち形式「うまっ」が実現する意味効果に類似)を実現する(Ikarashi (2015))。この特殊な意味効果がCP領域の欠落から派生されることを学会発表(1)で論証した(論文投稿中)。CPは聞き手への伝達性の保証に責任を持つ統語範疇であり(Tenny (2006))、CP領域の欠落は当該表現の伝達性の欠落につながる。よって、CPが欠落した表現は、聞き手への伝達を意図しない話し手の思考内容の曝け出しという意味に特化する。当該現象における主語の欠落は、統語構造においてCP領域が欠落していることを合図する構造指示として働くと言える。

(2) 日本語修辭疑問形成

Konno (2004)が「何をXを」構文と呼ぶ日本語特有の言語形式((3) 何を馬鹿げたことを言うの?[非上昇調])がある。この言語形式はもっぱら、発話時に何か予想外のことをしている相手の行為に対して、話し手が非難

の気持ちを表す修辞疑問文として用いられる。当該言語形式に生起する対格 WH 語は、一見するところ、非常に特異なふるまいを見せる。通常 WH 疑問文における場合とは異なり、聞き手に当該 WH 語の値指定を求めることはない。また、この WH 語が何らかの意味を担う命題構成要素の一部であると考えられることもできない。これらの点で、当該言語形式のどんな意味解釈にも貢献していないように見える。それにもかかわらず、この WH 語の生起は義務的である（(4) *（何を）馬鹿げたことを言うの？）、(4)のように対格 WH 語が不在の場合には、意図される修辞解釈が全く得られなくなる。雑誌論文(1)、及び、学会発表(2)では、「何を X を」構文が YES/NO 疑問文の修辞版であり、作用域決定のために演算子が WH 移動を受けるという分析を提示した（Sakamoto and Ikarashi (2014) でもこの分析の部分的な論証を行っている）。YES/NO 演算子は目に見えないため（Larson (1985)）、その移動も不可視的である。それでも作用域決定が適切に行われるという意味で、その不可視性は統語演算にとって何ら問題とならない。ところが実際の発話場面においては、YES/NO 演算子が WH 語として具現しなければ、当該の文が外見上、平叙文と見分けがつかなくなる。WH 語の具現は、「何を X を」構文（即ち、修辞 YES/NO 疑問文）において不可視的 WH 移動を含んだ統語構造の本質を聞き手に検知させる役割を担うので、いわば構造指示の仕組みとして機能する。

(3)日本語不変化詞残留

日本語には不変化詞だけが例外的に単独で生起する不変化詞残留という現象（(5) A: 歳は？ B: は、20 歳です。）がある。雑誌論文(2)、及び、学会発表(3)では、この現象がその統語的な振る舞いにおいて英語非制限関係節化と平行的であることを証明した。英語非制限関係節化と平行的であるということは、当該現象に WH 移動が関与しているということになるが、この移動を、目に見えない代名詞 pro とトピックマーカー「-は」による句の CP 指定部への移動として分析した。日本語では一般に、制限的關係節と非制限的關係節の音声的な区別がない。また、関係代名詞節には顕在的な演算子も存在しない（Kuno (1973), Ishii (1991), Murasugi (1991)）。当該現象においては、pro が演算子として機能するのだけれども、その生起は聞き手には不可視、つまり、聞こえない。これでは当該表現を英語的な非制限関係節化としての不変化詞残留であると聞き手が認識することができない。かくして、トピックマーカーの生起は、pro の存在を聞き手に認識可能なようにする。聞き手がいったん pro を検知すると、普遍文法の助けを借り、トピックマーカーの直後に現れる音声的な休止も頼りにして、当該要素が WH 移動を受けていることを理解することが可能となる。トピックマーカーの義

務的な生起は、聞き手が当該言語現象の構造を再構築するための構造指示として機能するのである。

(4)日本語属格複合語形成

日本語の属格複合語（(6) [N 緑の窓口] (nonmetaphorical) vs. [N 蜘蛛の巣] (metaphorical)）には少なくとも異なる二種類の派生が関与することを学会発表(4)で示した。前者には句由来の「属性記述的な「の」」が現れるのに対して、後者には言語使用者のメタファー解釈を保証する「類像的な「の」」が生起する。類像的な「の」が意味するところは、名詞要素の間に生起し、両要素の物理的距離を引き離すことが、複合語全体の指示解釈を間接的、つまり、メタファー的にすることと類像的に対応するということである。この類像的な「の」の生起は、言語使用者のメタファー解釈を保証するという意味で、構造指示というよりは、解釈指示を行っているといえる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) Sakamoto, Akihiko and Keita Ikarashi (2015) "Universal Grammar and the Mechanism of Structure Indication: A Case Study of the *Nani-o X-o* Construction," *Tsukuba English Studies* 34, pp.33-53. (査読有)
- (2) Sakamoto, Akihiko and Keita Ikarashi (2016) "Japanese Particle-Stranding as Nonrestrictive Relativization," *Proceedings of SICOGG* 18, pp.496-514. (査読有)

〔学会発表〕(計4件)

- (1) Sakamoto, Akihiko and Keita Ikarashi (2015) "Subjectless Sentences in Conversation and the Defectiveness of Their Syntactic Structures," International Workshop on Syntactic Cartography 2015, Beijing Language and Culture University.
- (2) Sakamoto, Akihiko and Keita Ikarashi (2016) "*Wh*-Movement and Rhetorical Yes/No-Questions in Japanese," Formal Approaches to Japanese Linguistics 8, Mie University.
- (3) Sakamoto, Akihiko and Keita Ikarashi (2016) "Japanese Particle-Stranding as Nonrestrictive Relativization," 18th Seoul International Conference on Generative Grammar, Sogang University.
- (4) Sakamoto, Akihiko, Keita Ikarashi, and Ryohei Naya (2016) "The Form-Function Interface in Japanese Compounding For-

mation,” The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, National Institute for Japanese Language and Linguistics.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

坂本 暁彦 (Sakamoto, Akihiko)
常磐大学・コミュニティ振興学部・助教
研究者番号：50757193

(2)研究協力者

五十嵐 啓太 (Ikarashi, Keita)
会津大学短期大学部・幼児教育学科・講師

納谷 亮平 (Naya, Ryohei)
筑波大学大学院生・日本学術振興会特別研究員